



日本における「台湾」の呼称の変遷について : 主に近世を対象として

横田, きよ子

(Citation)

海港都市研究, 4:163-183

(Issue Date)

2009-03

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81000958>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81000958>



日本における「台湾」の呼称の変遷について

——主に近世を対象として——

横田 きよ子
(YOKOTA Kiyoko)

はじめに

「台湾」には先住民がいたが、清朝支配下となるまで、対外的な統一名は無かった。中国『明史』¹「列伝二一一」では、鄭和が15 C前半に、この島を「蓋擬之狗國也」と言ったと記している。明代には海賊等の跋扈する島となり、明代末には、オランダ人とスペイン人も占拠居住し、貿易港となった。

日本においては江戸時代に、鄭成功の支配した島として、また、浜田弥兵衛事件（1628）の舞台として²有名となり、種々の呼称がみられるようになった。本稿はその呼称の変遷について記述するものである。なお、調査資料中の各語の用例を末尾に参考資料として附した。

I 「琉球」系（国内資料所見 1602,1631、外国資料所見 1269～1840）

1 「小琉球」（国内資料所見 1631、外国資料所見 1532～1840）

中国の資料では、志磐『佛祖統紀』³（1269）巻32「東土震旦地里図」に、「流求國居海島」と書かれ、地図「東震旦地理圖」も掲げている。「四海華夷総図」⁴（1532）では、北から「日本國、倭、大琉球、小琉球」が並んで記されている。陳侃『使琉球録』⁵（1534）は「見一小山乃小琉球也」「琉球……蓋所望小琉球也」と説明する。これによれば、沖縄への冊

1 『明史（三二三）』（1958 商務印書館）による。

2 平田篤胤『古道大意』（1824）に「七人の若者が台湾の国でとんだ豪傑の振舞をして」とある。

3 『大正新脩大藏經 第四十九卷 史伝部一』所載。地図には、北から「扶桑・日本・蝦夷・流求」を描く。

4 調査は織田武雄等編『日本古地図大成 世界図編』（1975 講談社）による。以下特に断りのない古地図資料は全て同じ。参考資料の「資料」の欄で各項目の頭に番号を附している。

5 『四部叢刊統編 一九』（1976 臺灣商務印書館、原本は明嘉靖刻本、pp. 9350, 9362）による。

封使の記録には台湾を「小琉球」と記していたことになる。鄭若曾撰『籌海図編』⁶ (1562) 所載の「輿地全図」は、沖縄を「琉球」、台湾島は「小琉球」、同「日本国図」は、沖縄を「大琉球」、台湾島を「琉球」と書いている。「使倭針経図説」は、倭への進路の説明文で「梅花東外山開船用単辰針乙辰針或用辰巽針十更船取小琉球」「小琉球套北過船遇正鷄籠嶼及梅花瓶彭嘉山」と記す。胡宗憲『海防圖論』⁷ (1622)「海防図」では「日本、大琉球、小琉球」と描かれ、「小琉球」は台湾諸島を指している。王圻等編『三才圖會』⁸ (1609 頃) では「大琉球國」と「小琉球國」とを区別し、後者が台湾島を指している。

元々中国では、沖縄と台湾の全体を「流求」と称していた。やがて朝貢国である沖縄を「大琉球」とし、一方朝貢していない台湾を野蛮な島として「小琉球」と呼ぶようになったのであろう。『三才圖會』では、「大琉球國」について「國朝進貢不時王子及陪臣之子皆入太學讀書」と書かれ、文化的な国であるとしている。

しかし中国の地図でも、『唐土皇輿全図』(1806)や『唐土全図』(1840)では「小琉球」と書いて「台湾の属島」を指している。台湾の属島の呼称としての「小琉球」は、後述するように、西洋の地図では 16 世紀頃既に示されているが、中国の地図では 18・19 世紀に出現している。

西洋の資料では、オルテリウス図 (1570 年)「東インド図」に北から順に「Lequio maior, Y. Ferosa, Reix magos, Lequio minor」⁹と記す。台湾は「小琉球」に相当するが、「大・小琉球」いずれかの属島として「フェルモサ島」も描かれている。神戸市立博物館蔵オルテリウス「太平洋図」¹⁰ (1589) においては、北から「Lequei grande, Lequeio pequenno」(「pequena」はポルトガル語「小さい」)が描かれている。台湾は「小琉球」に当たる。ヨアン・ブラウ「アジア図」¹¹ (1665) では、北から「Lequeo grande, Das

6 王純盛編『中国兵書集成 15』(1990 解放軍出版社、原本は明胡宗憲刻本)による。「輿地全図」p. 50、「日本国図」p. 277、「使倭針経図の福建使往日本針路」p. 212、p. 214。

7 王純盛編『中国兵書集成 16』(1990 解放軍出版社、明天啓年閏聲刻兵垣四編本) p. 1349。

8 『三才圖會』(1988 上海古籍出版社、原本は上海図書館蔵明萬曆王思義校正本) p. 836。

9 「大琉球、フェルモサ島、レイクス・マゴ諸島、小琉球」となる。「maior」は、ポルトガル語「grande」(大きい)の比較級、又は、ラテン語「magna」(大きい)の比較級「major」。「minor」はラテン語「parva」(小さい)の比較級。「Reix magos」は、「八重山諸島」(村井章介「銀山と海賊」『第3回国際シンポジウム彙報』2003)とも云われるが、この地図では、現在の「赤尾島・黄尾島・釣魚島」(古くは「赤坎島・黄麻島・釣魚島」)を指していると考え。東北大学狩野文庫の「小加呂多」に、「タカサコ」の北に「レイス」(レイクス・マゴ諸島)として二島、東に「ヤ、マ」(八重山諸島)が描かれている。

10 神戸市立博物館所蔵出版複製地図による。

11 『Joan Blaeu ATLAS MAIOR of 1665』(Taschen)による。

Reys Magos」があり、「I. Formosa, Lequeo pequevo, Lequio minor」と三つの島が「台湾諸島」のように並び描かれている。他にも、プランシウス図¹² (1594)、メルカトル「アジア図」¹³ (1595)、ホンディウス・ジュニア世界図¹⁴ (1617) には、台湾は「小琉球」を意味する「Lequio minor」「Lequio pequena」等と書かれている。

西洋の地図において、上記「東インド図」等とは逆に、「小琉球」が「I. Formosa」の属島として書かれているものもある。ヨーデ図¹⁵ (1578)、リンスホーテン図 (1598)、ホンディウス図 (1613)、ベルティウス図¹⁶ (1610) 等である。ポルトガル人の命名「ホルモサ島」が知られるようになって以降、それ以前の台湾の呼称「小琉球」と「ホルモサ島」が共存して地図に示されるようになり、その関係には混乱が見えるのである。

日本人の目に触れた地図で、台湾を「小琉球」とする例は、日本で翻刻された『皇明輿地之図』(1631) にのみ見ることができる。

一方『南瞻部洲図』(1709) では、沖縄を「大琉球」とし、その南に「小琉球」、西に「大宛、葛仙谷」と書く。最後が台湾に当たる。『朝異一覧』(1835) は「琉球国」の北に「大島、小琉球トモ云」と記す。中国の『唐土皇輿全図』等は「小琉球」を台湾の属島としているが、この地図では「小琉球」を沖縄の属島と示していることになる。『倭漢三才図会』¹⁷ (1713) では「大宛」の項目中でなく「琉球」の項目中に「三才図会云 有大琉球小琉球 各出名玉異寶 其國在福建泉州東」と記す。それに対し、藤原家孝『落栗物語』¹⁸ (1779 以前) は「阿蘭陀の出城をかまへて、立籠りたる臺灣と云所を攻落して引籠りける、……北は福州に対し、南は小琉球に近、五穀豊穰也」と書き、「小琉球」は台湾の南にある属島としている。日本では、「小琉球」という呼称は中国から伝わっていたものの、「小琉球」がどこを指すか明瞭には理解されず、台湾を示す呼称としての「小琉球」は大部分の日本人に知られていなかったと考えられる。

近代になって、教科書『小學地理附図』、『日本輿地圖』(共に 1906)、『袖珍改新日本詳図』¹⁹ (1923) では「臺灣」の南方「東港」の南に「小琉球島」を記す。『ブリタニカ国際地図』²⁰

12 チャールズ・ブリッカー『世界古地図』(1985 講談社)。

13 複製地図による。

14 Rodney W Shirley『The Mapping of the World』(1983 the Holland press limited) plate230。

15 チャールズ・ブリッカー『世界古地図』所載 (1985 講談社)。以下の 3 地図同書。

16 複製地図による。

17 吉川弘文館 (1906) 影印による。

18 『百家随筆 第一』(1917 国書刊行會) p. 489。寛永年間から安永 8 年の見聞録という。

19 小川琢治編『袖珍 改新日本詳図』(1922 富山房) 第二十九図。

20 『ブリタニカ国際地図』(1978 ティビーエスブリタニカ) p. 91。

(1978) には「Liuch`iu hsü」と書いた小さな島が見える。これは「琉球嶼」を意味する。

小葉田淳氏は「小琉球とは、つまり琉球に到るに、最初の目標となったものをかく称したのであろう。」「大小琉球の名は、疑いもなく中国人から聞いたものである。」「(小琉球は) 架空の存在ではなかった筈である。」との見解²¹を示している。また幣原坦氏²²は「小琉球が臺灣の一地方のみの称である事」、「小琉球といふのは、所謂瑯嶠地方を指してゐるから、小の字を冠せしめた中国人は、決して誤つてゐなかつたのである。」と述べている。両氏は「小琉球」を台湾島の地方名としている。

これらの見解に対して、筆者は次のように考える。もと①宋、元代の中国では「沖縄、台湾を含む諸島」を「流求」と呼び、次いで②明代の中国では朝貢してきた沖縄を讃えて「大琉球」と呼んだ。それとの関連でその他の島々を「小琉球」と総称した。更に③その中から最も大きな台湾島を代表して「小琉球」と呼んだ。次いで外国人、鄭成功、清朝が占有し異名をつけ、④台湾に独自の地名「東都」「臺灣」等が与えられると、⑤その属島(琉球嶼)にこの「小琉球」という呼称が残った。⑥琉球嶼の中の一小島のみを指して「小琉球」と呼ぶようになった(①, ④, ⑤, ⑥は歴史的事実)。しかし日本では、17C 前半には「小琉球」という呼称が中国から伝わったものの、「小琉球」で台湾を指すことは通用せず、(1)18C には沖縄の属島または、台湾の属島の呼称とされたが定着せず、(2)20 C には台湾の属島の呼称として再び受容された。

2 「大琉球」(国内資料所見 1602、中国より渡来の世界地図)

唯一、日本人の目に触れた地図で台湾を「大琉球」と表記する資料として、宮城県図書館蔵マテオ・リッチ作『坤輿萬国全圖』²³ (1602) がある。これは、マテオ・リッチの個人的判断²⁴によるものであり、中国でも定着せず、他の地図にも影響を与えなかった。

II 「ホルモサ」系(国内資料所見 1618～1878、外国資料所見 1570～現在)

この系列は、ポルトガル語「formosa」に由来する。『World Place Names』²⁵ には、「It

21 小葉田淳『日本経済史の研究』(1978 思文閣)「台湾古名随想」pp. 646～649。

22 幣原坦『南方文化の建設へ』(1938 富山房) p. 68, p. 69。

23 『利瑪竇 坤輿萬国全圖 萬曆三〇年刊』(1997 臨川書店複製)。

24 「大琉球」は面積の大きいことからか、又は、世界地図で本来右端描写の中国を漢訳作製では中央にくるように変形させていると同断で、中国の支配が及ぶ島として重視したためか。

25 John Everett-Heath 『The Concise Dictionary of World Place-Names』(2005 Oxford

was named 'Beautiful Island' in 1590 by the Portuguese.」と説明されている。また『臺灣史』²⁶は、「嘉靖三十六年（公元 1557）、葡萄牙人……多分設領館。当其航經台湾海峡、遙望台湾、樹木青籠而美麗、乃譽之島（Ylhas Formosa）；於是台湾之名、遂廣播於世、而啓歐人覬覦之心矣。」とし、また『台灣懷舊』²⁷は、「明世宗嘉靖 23 年（1544）、葡萄牙航海者在通過台灣、看見上古木參天、風光明媚、但不知島名為何、而稱其為 Formosa（福爾摩沙、意為美麗之島）」という。それぞれ命名年が異なる。各々根拠は明確に示されていない。西洋の地図では、以下のように、1570 年から現在に至るまで使用され続けている。

オルテリウス『鞆輿図』（1570）に「Isola fermosa」とあるのを初め、ヨアン・ブラウ『アトラス』²⁸「中国図」（1665）に「I. FORMOSA」、ラ・ベールズ『東アジア探検図』（1798）に「I. FORMOSE」、デ・ベラ「呂宋臺灣圖」²⁹（1626）に「Ysla Hermosa」と記す。メリアンマテオ『中国図』³⁰（1646）は、島名「Pakan al Formosa」都市名「Tayoan」が示されている。ライヒャルト『アジア図』（1805）は、「TAI-YUAN oder FORMOSA」と記す。

日本の資料で最も古いのは『元和航海記』³¹（1618）である。台湾のことを「イ、リヤヘルマウザ」と書き、その傍注に「タカサゴト云事也」とある。「イ、リヤ」は、スペイン語「isla」やラテン語「insula」ではなく、「島」を意味するポルトガル語「Ilha」による。「ヘルマウザ」は、ポルトガル語「Formosa」又はオルテリウス図等の「Fermosa」の発音を聞き取ったのであろう。当時著者池田好運が認識していた通常の島名は「タカサゴ」であり、傍注としたのである。『イギリス商館長日記』³²では「Fermosa」が 1616～1620 年の日記に 9 例、アダムスと日本人の会話内容として「スペイン人によってエルモサ（Hermosa）と呼ばれている島」1 例が 1616 年に見える。17 世紀初期とされる『ポルトラーノ式航海図』³³では「ホルモ□」（□一字不明瞭）と書かれている。不鮮明の文字が一字あって他との比較はできないが、航海者の間での呼称が「ホルモサ」系であったことを示している。

University Press) p. 511。

26 林衡道『臺灣史』（1977 衆文圖書股份有限公司）p. 64。

27 謝森展『台灣懷舊』（1990 創意力文化事業有限公司）p. 24。

28 注 11 に同じ。

29 岩生成一「南洋日本町の盛衰（三完）」附図（『台北帝国大学文政学部史学科研究年報』1937）。

30 新田満夫『西洋古版 日本図精撰』（1967 雄松堂書店）。

31 京都大学図書館蔵本による。

32 リチャード・コックス『イギリス商館長日記』。東京大学史料編纂所『日本関係海外資料』（1980～1982 東京大学出版会）の原文編、訳文編、索引編を利用した。

33 南波松太郎等『日本の古地図』（1969 創元社）p. 11。

蘭学者は次のように表記した。森島中良は、『紅毛雑話』³⁴ (1787)、『萬國新話』³⁵ (1789)、『蛮語箋』³⁶ (1798) で、蘭書により「ホルモウザ」、「ホルモーサ」と書いている。山村才助は、『訂正増訳采覧異言』³⁷ (1804) に「福爾謨沙」とし、右振り仮名に「ホルモーサ」、「支那ノ人ハ呼テ『タイオワン』臺灣ト云フ」としている。箕作省吾『坤輿図識』³⁸ (1847) には、「ニウエンホイス」以下7種の書物を引用したとし「臺灣 フアルモザ」と書き、箕作阮甫『改正増補蛮語箋』³⁹ (1847) は、「フアルモザ formosa」と表記している。箕作家の人々は、より外国音に忠実に「フヲ」と訳している。語尾の「ザ」はポルトガル語の発音である。箕作阮甫訓点『地球説略』⁴⁰ (1856) は、アメリカの宣教師裨理哲の著であるが、「ホルモサ」(英語訳)・「ホルモザ」(蘭語訳) 両様の振り仮名を附している。

英学者は次のように表記した。「英國庸普爾地(イヨンビツルヂ)氏著」から訳された『輿墜航海圖』⁴¹ (1858) は、台湾海峡は「ハルモサ夾」、島名は「ハルモサス」と書いている。岡修撰『増訂輿地航海全図』⁴² (1872) にも「ハルモサ夾」と「ハルモサス」が見える。「此書原本ハ『マツケー』氏及『ゴールド、スミス』氏ノ地理書英訳及『カラムルス』氏ノ地理書英訳等ニ拠リ抄譯」「地名ノ読法國ニヨリテ同ジカラス今此編ニハ多ク英語ヲ用」とする内田正雄『輿地誌略』⁴³ (1874) は、「ホルモサ」と記す。「英國ヒリブ氏著」から訳したとする『小学用萬國地図』⁴⁴ (1878) も島名「ホルモサ」と都市名「タイワン」が見える。英学書とはやや異なる資料であるが、『航米日録』⁴⁵ (1860年) は、「ホルモサ島」と記す。

日本では、海禁の始まろうとした頃から片仮名書きされ、南蛮紅毛人の呼称との認識で使用されていた。外国人によるポルトガル語的、ラテン語的発音を聴取し、書かれた。し

34 森島中良『紅毛雑話』巻三8丁裏に「ホルモウザと云。華人は呼んで臺灣(たいわん)といひ。又東寧(とくねぎ)ともいふ」とある。『江戸科学古典叢書31』(1980 恒和出版)。

35 『萬國新話』巻末(巻之四)18丁表に「ホルモーサ」。

36 『蛮語箋』「萬國地名箋」3丁表に「ホルモーサ」。

37 青史社覆刻による。

38 巻天、33丁表「フアルモザ」。

39 「萬國地名箋」3丁裏。

40 『地球説略 上巻 亞細亞大洲之部』9丁裏に「臺灣」の左振り仮名「ホルモサ」、34丁裏に「臺灣」の右振り仮名「ホルモザ」。「亞細亞洲圖」では「臺灣」とのみ記す。著者原名は、Richard Quarterman Way (1819-1895)。

41 名雲書店「カタログ72」(2008) p. 124による。

42 岡修撰『増訂輿地航海全図』(1872 初版の1875版)。

43 巻二15丁表。

44 尾藤庸一著訳『小学庸萬國地図』(1878 刊 鈴木久三郎出版)。

45 『文明源流叢書第三』(1914 国書刊行会) 所収。原本は帝国図書館所蔵写本。豊前守従臣玉蟲誼(茂誼)の自記。

かし、海禁以後は航海図にのみ見られ、海洋航海者の間で主に伝えられた。その後オランダの地理書が入るようになると、オランダ人の発音をまねて訳されるようになり復活した。海禁が解かれて以後は、英学者を中心に、英語を経由しても同系統の呼称が受容された。

Ⅲ 「たかさご」系（国内資料所見 1593～1820、外国資料所見 1615～1621）

1 「高山国」（国内資料所見 1593）

「高山国」は、日本における年代のはっきりした最古の台湾呼称で、豊臣秀吉の国書⁴⁶（1593年）に見られる。有馬晴信の心得書（1609年）に「たかさくん」と書かれているので、『異國往復書簡集』⁴⁷では、「高山國はタカサグンに當てたる文字にして」と注記している。また日本史学ではこの読み方が通説となっている⁴⁸。しかし、バークレー美術館所蔵「世界図屏風」⁴⁹（三井家旧蔵）には、「たかさんこく」とある（但し、台湾の地形と場所が現実の台湾と異なっている）。この読みをあてるのが妥当ではないかと考えられる。

2 「たかさくん」「たかさぐん」（国内資料所見 1596頃、1609～1615）

所見資料は有馬晴信の台湾貿易に関する3点の文書と御朱印帳、及び『浦戸漂着西班牙船航海地図』（原1596作製図の模写）と16世紀末とされる山本氏蔵『世界図屏風』（京都国立博物館寄託）である。『浦戸漂着西班牙船航海地図』は『日本古地図大成』の解説によると、1596年スペイン船サン・フェリペ号漂着時に秀吉の派遣検使増田長盛がスペイン地図を模写させた写しだという。書写の年代はやや下るという。秀吉の国書より3年後頃のことであるから、元からこの地名が書かれていたとして、早い時期に「たかさくん」に変化していたことになる。スペイン地図ならラテン語又はスペイン語で書かれてい

46 村上直次郎訳註『異國往復書簡集』（1929 駿南社）「文禄二年豊臣秀吉の台湾に入貢を促したる書」p. 68。

47 注46と同書。

48 幣原坦『南方文化の建設』（1938 富山房、p. 69）等。「高山國」の読み方が不明とするか、「たかさぐん」に漢字を当てた、または「たかさくん」と読むとしている。ただ、『国史大辞典』「たかさぐん」の項目で、中村孝志氏が「一般に台湾南部、打狗（打鼓）山方面に赴いた日本人航海者の称えたものが、起源といわれるが確証はない。むしろ豊臣秀吉が文禄二年（一五九三）、招諭しようとした「高山国」を湯桶読みしたものから転じたと思われる。」と述べられている。「湯桶読み」とは「たかさんこく」か「たかさくんに」であろう。「たかさんく」なら音韻変化で「たかさぐん」となりうる。しかし、筆者が本文で述べるように「たかさんこく」のみ用例を見出せた。

49 この「世界図屏風」と対の「日本図屏風」には「せんたい」の記載がある。矢守一彦『古地図への旅』（1992 朝日新聞社）によると仙台と改名されたのが、1601年であるとされる。本稿の筆者は、屏風は1601～1609年に製作されたとしてよいと考える。

た筈で、同席していた通詞の知識で「たかさくん」と訳され、書かれたのであろう。次いで、有馬晴信の墨付写⁵⁰（1609、有馬晴信から谷川角兵衛宛、徳川幕府の内命による発給）に「たかさくん国」（4例）「たかさくん」（1例）「たかさくん人」（1例）のように書かれている。有馬晴信の掟（1609、有馬晴信から谷川角兵衛宛、渡海者についての掟）には、「今度たかさくん渡海之者共」と書かれている。久能文書（1610、有馬晴信の朱印とされる押印がある）には、同一文書の中に「たかさぐん」「たかさこ人」「たかさこ」が各一例見える。また「彼国之為に」「彼国より使者召連可致帰朝候事」とあり、台湾を一国家と認識している。前掲「たかさくん国」は、「たかさくん」が「高山国」からの変形とすると、「国」が二重に付いたことになり、本来ならおかしい。既に「高山国」から変化した呼称との認識がないことになる。口頭で伝わっていた地名であったため、その由来が忘れられたのであろう。1615年御朱印状⁵¹には「高砂國」と書かれ、その三文字に対して右振り仮名に「タカサグン」と書かれている。

これらの5資料の例は、当時の日本人にこの島を「たかさくん」と呼ぶ習慣があったことを示している。中国には、これに類似する呼称はなく、用例も限られており、日本の航海者達と通詞達の内では伝えられた呼称であろう。

(1) 「たかさこ」「たかさご」（国内資料所見 1610～1820頃）

「たかさこ」の呼称は原住民発音を外来語として書き留めたものだという説がある。内田銀蔵氏⁵²は「打狗山（タアカウソア）を転化してタカサゴと呼び、最初は之を以て其の附近、即ち南部の一地方を指す名称として用ひたるならんが、既にして全島を指示する名称となりしものの如し。」とされる。『言海』⁵³『広辞苑』⁵⁴等、沖縄語「たかさぐ」との関連を指摘する辞書もある。しかし、これらは「高山国」「たかさこく」「たかさくん」との関連を考慮していない点で不自然である。本土方言と沖縄方言には〈o-u〉の対応関係があり、寧ろ「たかさご」が沖縄に入って「たかさぐ」と転訛したと考えることもできる。

前述のように、幕府の命が明らかな 1609 年の「墨付写」と「掟」には「たかさくん」（計

50 東京大学史料編纂所『大日本史料第十二編之五』（1904 東京大学出版会）pp. 132～139。

51 注 47 と同書、p. 334）第二号異國渡海御朱印帳「高砂國〈タカサグン〉始而被遣候也」「自日本到高砂國舟也 等安ニ被下候、長谷川左兵衛状アリ、元和元 7 月廿四日南禪ニて書候也、左兵状来、功不来、後ニ来、右 元和元乙卯九月九日」。

52 『国史総論及日本近世史』（1921 同文館）。

53 大槻文彦『言海』（1918 吉川弘文館）「高砂」の項目に「(琉球語タカサングから) 台湾の別称」、『新編大言海』（1934 富山房）に「天竺徳兵衛ノ天竺渡航ノ紀行ニ、たかさぐん（高砂国）トアリ（長崎港草）、又秀吉台湾文書ニ、高山国（タカサングン）トアリ、又沖縄ニテハ、たかさぐトイヘリ」。

54 『広辞苑』（第 6 版）「高砂」の項「(琉球語タカサングから) 台湾の別称」。

7例)のみが見えるが、一年後の「掟」では「たかさぐん」1例「たかさこ」2例が書かれ、不統一である。このことから、一般の船乗りの間では、1610年当時「たかさこ」が既に普通の呼称であり、それに対して、「たかさぐん」は古い正式な呼称であったと考えられる。そのことは、1615年御朱印状では、漢字「高砂國」に「たかさぐん」と読みを宛てていることでも分かる。

仮名表記「たかさこ、タカサコ」の用例は、他にも以下の資料に見える。中村惕斎『訓蒙図彙』⁵⁵ (1666)、16世紀末とされる⁵⁶ 小林氏蔵『世界図屏風』(元池田家旧蔵)、17世紀初とされる地図では、香雪美術館蔵『世界図屏風』⁵⁷、南蛮文化館蔵『世界図屏風』、神宮徴古館蔵と清水氏蔵の『東亜航海図』2種、西大寺蔵と神戸市立博物館蔵の『万国総図』2種に見える。年代の明らかな地図では、神戸市立博物館蔵『世界人形図』(1645)、下郷氏蔵『世界図屏風』と神戸市立博物館蔵『万国総図』その対『世界人形図』(1652)、『波丹人絵巻』(1680)、『小加呂多』と神宮徴古館蔵地球儀(1690、「東寧」も記入)、南波氏蔵『世界図屏風』(1698)に見える。次いで『倭漢三才図会』(1713)と『啁蘭新訳地球全図』(1796)には、万葉仮名の読みとして、片仮名で「タカサコ・タカサゴ」と記す。前記『元和航海記』(1618)、『扶桑国之図』⁵⁸ (1666)にも片仮名表記の例が見える。『異国渡海船路ノ積り』(1637)では「鶏頭籠」の振り仮名として片仮名で、また『増補華夷通商考』⁵⁹ (1709)には「たかさこ」の読みが書かれ、西川正昌『長崎夜話草』⁶⁰ (1720)、西川如見『四十二國人物図説』⁶¹ (1720)に万葉仮名の振り仮名として、平仮名・片仮名で書かれている。また谷川士清『和訓栞』⁶² (1800頃)、山片蟠桃『夢ノ代』⁶³ (1820)で「タカサゴ島」、太田全斎『俚言集覧』⁶⁴に「たかさこ」と書かれている。

(2) 「Taccasanga」「Taccasanng」「Taccasango」(1615～1621)

ローマ字表記の例が『イギリス商館長日記』⁶⁵ (リチャード・コックス著)に見える。

55 『訓蒙圖彙』(1975 早稲田大学出版部、原本は内閣文庫蔵本)。

56 『日本古地図大成』では16世紀末とされるが、筆者は、「たかさこ」の使用より1610年以後と考える。

57 香雪美術館所蔵の『世界図屏風』写真と映像拝借により確認。

58 注34と同書、p. 36。

59 『日本水土考・水土解弁、増補華夷通商考』(1944 岩波文庫)。

60 三島才二『南蛮紀文選』(1925 洛東書院)による。

61 小野忠重『紅毛雑話』(1943 双林社)による。

62 『増補語林和訓栞』(1973 名著刊行会)による。

63 『日本思想大系43』(1973 岩波書店) p. 257。

64 『増補俚言集覧』(1965 名著刊行会)。

65 注35と同書。

- 「Taccasanng」(たっかさんげ)は2例。(1616)
- 「Taccasango」(たっかさんご)は2例。(1617、1618)
- 「Taccasanga」(たっかさなが)は14例。(1615～21)

語尾が「ゲ」「ゴ」「ガ」と異なっているのは、コックスと接した中国人やポルトガル人にも英人コックスのいずれにも聞き慣れない地名であったからであろう。日本国内の地名である播磨の「高砂」をコックスはタッカサンガ「Taccasanga」(1616年11月25日)と書いている。彼は「カ・タ」が語中の時、促音を挿入し、語中語尾のガ行鼻濁音には、「ン」を入れて表記している。またこの資料に「小琉球」「大冤」等他の呼称が見られないことは、当時、日本での台湾の呼称は「Taccasanga」即ち「たかさご」が一般的であったことを示している。

(3) 万葉仮名的表記(国内資料所見 1627～1810)

『通航一覧』⁶⁶によれば、『柳當年表秘録』(1627)に「塔伽沙古」、『異国日記』(1627頃)に「多加佐古」が見られる。前記『異国渡海船路ノ積リ』(1637)に「多加佐古」、17世紀の南蛮屏風三種⁶⁷に「多加佐古」、『本朝図鑑綱目』⁶⁸(1687)に「他賀佐吾」、『増補華夷通商考』(1709)に「此島本の名は塔伽沙谷也」、『倭漢三才図会』(1713)に「塔曷沙古」、『長崎夜話草』(1720)に「塔伽沙谷」「答伽沙古」、『四十二國人物図説』(1720)に「答伽沙谷」、『噶蘭新訳地球全図』(1796年)に「塔伽沙谷」、天錫道人『一宵話』⁶⁹(1810)に「塔伽沙古」がそれぞれ見える。

(4) 「高砂」(国内資料所見 1615～1713)

「たかさご」に対して日本人に親しまれた漢字を宛てたのである。家康の村山等安宛渡海朱印状「高砂國」(1615)、立原翠軒『呂宋覚書』⁷⁰(1671)、阿蘭陀風説書(1684)等に見られる。御朱印船貿易の「高砂」あて回数は、1615年以外では、1618年を初めとし、1635年まで29回である⁷¹とされる。台湾が清朝領土となった後では、『増補華夷通称考』(1709)が「日本の人、高砂の文字を仮用ゆ」と述べ、『倭漢三才図会』(1713)でも「和用高砂字」と書き、「高砂」が本来の地名ではないことが述べられている。日本人にとっては、「高砂」は万葉仮名的表記よりも一層地名らしく感じられたであろう。

66 早川順三郎『通航一覧 第五』(1913 国書刊行会) p. 384。

67 中村拓「南蛮屏風世界図の研究」(『キリシタン研究』第九輯 1964 吉川弘文館)。

68 注34と同書、p. 38。

69 『日本随筆大成 19』(1978 吉川弘文館)による。

70 吉田文治編『海表叢書巻六』(1928 厚生閣書店)による。

71 岩生成一「南洋町の盛衰(一)」(『台北帝国大学文政学部史学科研究年報』1935)による。

IV 「東寧」系（国内資料所見 1666～19 世紀中頃）

1 「東番」（国内資料所見 1666、中国資料所見明代）

「東番」は中国の表記で、「東の野蛮地」という意味である。鄭氏支配に関わる名称ではない。本来「東寧」系とは異なるが、「東」という方角を示す点が一致しているので本章で扱うこととする。『明史』（列伝二一一）には「鶏籠山在澎湖東北 故名北港 又名東番」と書かれている。取るに足らぬ野蛮島との認識が明代よりあったことが理解される。中村惕斎『訓蒙図彙』（1666）には「東番今按たかさご東番夷也」と書かれている。

2 「東都」（国内資料所見 1776、79 以前、中国資料所見清代 18 世紀初期）

王士禎『香祖筆記』⁷²（1702）「台湾古荒服、……成功既有臺灣、以赤嵌城為承天府、臺灣土城為安平鎮、総名曰東都。」とある。青木昆陽『続昆陽漫録補』⁷³（1776）はこれを引用する。『落栗物語』に「延平王もこゝをば根本の地と定、承天府と名付また東都とも云」と書かれている。鄭成功が台湾を占領（1661）し名付けた名称である。彼の死後「東寧」と改名されているので、歴史上は2年間の使用である。「（明の都である）南京から東の方角にある都」の意味であろう。

3 「東寧」（国内資料所見 1672～19 世紀中頃、中国資料所見清代 18 世紀初期）

1672 年の阿蘭陀風説書に「トウネイ」、同資料の 1673 年以降に 4 例の「東寧」が見える。前掲『香祖筆記』（1702）には「経僭立。改東部曰東寧。改縣曰州」と書かれている。しかし日本では鄭成功が有名であり、鄭経が改名した事実はあまり広く知られていない。『南閩浮提諸国集覧之図』（1744）と『万国集覧図』（江戸末期）には、説明文に「た いわん とうねいは国姓爺が住し処なり」と書かれている。また榎島昭武『書言字考節用集』⁷⁴（1717）にも「大宛タイワン、タカサゴ 又云臺灣○国姓爺住于斯改国号为東寧」と説明されている。また『増補華夷通商考』（1709）に右振り仮名「とうねい」、森島中良『萬國新話』⁷⁵（1789）巻之四に「東寧」の右振り仮名「とくねぎ」、『啁蘭新訳地球全図』（1796）に「トク子ギ」

72 明清筆記叢書『香祖筆記』（1982 上海古籍出版社）p. 16。

73 『日本随筆大成 20』（1978 吉川弘文館）による。

74 中田祝夫『書言字考節用集研究並びに索引』（1973 風間書房）。

75 「寛文年間国姓爺厦門より此嶋へ押渡り、紅毛人を追払ひて、おのれが居城となし、地名をも東寧と改ける事はあまねく人の知所なり」この本には「臺灣、ホルモーサ、東寧、大宛」と各種の呼称が見える。

の右振り仮名がそれぞれある。当時の唐音を写したものであろう⁷⁶。

日本人には、日本に縁のある「国姓爺」と「東寧」が結びついて記憶されていた。鄭氏は三代 22 年で 1683 年清軍に降り、台湾は福建省管下となる。国内資料では、所見 31 例のうち 5 例が鄭氏支配の時代に合っており、26 例は鄭氏滅亡後の用例である。清朝に帰した後も、日本では国姓爺の記憶と共に江戸末期⁷⁷まで使用され続けたことになる。「東寧」の意味について、『華夷通商考』に「国姓爺居住以後ハ、国号ヲ東寧ト改ム、此島中華之京都ヨリ南ニ当レルニ、東寧ト号スル事、国姓爺生国日本ヲ慕ノ心ニヤト云」とある。実際は、明の都南京即ち「江寧」の地より東にあるので、「東寧」としたのであろう。

V 「大宛」系（国内資料所見 1688～現在）

1 「大宛」（国内資料所見 1688～1853）

日本では、「大宛」の例としては石川流宣作『万国総界図』（1688）が最も古い。以後写本『南瞻部洲図』（1698 頃）より『万国山海通覧分図』（1853）まで、多くの地図に見える。『増補華夷通商考』はこれを中国の呼称であると指摘している⁷⁸。例えば中国の地図では、西田栄欣手書『中華古今分国大成図』（1728）、浪華青苔園誌『清朝一統之図』⁷⁹（1835）に「大宛」の表記がある。

『増補華夷通商考』には、振り仮名「たいわん」が記されている。また『倭漢三才図会』（1713）は、見出し語「大宛」の右上傍書に「たいわん」を記す。森島中良『萬國新話』（1789）巻之四には「だいわん」の振り仮名（1 例）が附されている。1709～1853 年まで 8 資料に傍書として「たいわん」「タイハン」が記されているが、「大」を濁音「だい」としているのは稀で、他の多くは清音「たい」である。『万国総界図』（1688）と『南瞻部洲図』（1698）に「たかさこ」、『大明国十三章之絵図』（1725）に「たかさご」と付した例が見える。17 世紀末の資料が「大宛」に「タカサゴ」等の振り仮名を付したのは、その当時の日本人にとって最も普通の呼称が「たかさご」であったからである。

76 『太閤記』に朝鮮半島の地名「東萊」を「とくねぎ」とした例があるが、関係は明らかでない。

77 『清朝一統之図』（1835）『万国集覧図』（19 C 中頃）

78 「此島根本の名は塔伽沙谷也。日本の人高砂の文字を仮用ゆ」（p. 117）。

79 注 34 と同書 p. 17。

2 「大宛」(国内資料所見 1709、1717)

『南瞻部洲図』(1709)と『書言字考節用集』(1717)に「大宛」が示されている。『南瞻部洲図』では、「大宛」の右横に下げて、鮮明ではないが「葛汕谷」(「汕」は「仙」か。また冒頭に一字欠字があるか。)とも書かれている。類似する他の東洋系世界図⁸⁰の「大宛」に対して異例の表記である。『書言字考節用集』では、「大宛」の右振り仮名として「タイワン」と附す。更に左振り仮名として「タカサゴ」と記す。

3 「大ワン」「大ハン」「たいわん」等(国内資料所見 1713～1891)

『世界三國記』(1800)と『蒙古退治万国早分図』(1853)とに「大ハン」、『世界六大洲』(1850)に「大ワン」と記す。小型の地図故の表記である。元の漢字は決定し得ない。『新訂坤輿略全図』(1852)には「タイ湾」と書かれている。

平仮名書きの例としては、『倭漢三才図会』に「たいわん」とあり、『南閩浮提諸国集覧之図』(1744)とこの後継版『万国集覧図』(江戸末期)の説明文中に「たいわん、とうねい」と記す。片仮名書きは、『新製輿地全図』⁸¹(幕末頃)に「ダイワン」が1例、『地球一覽図』(1783)以下『萬國地図』⁸²(1891)までに「タイハン」「タイワン」が15例見出された。

4 「大湾」(国内資料所見 1794、1798)

「大湾」は、『北槎聞略』(1794)付録地図(振り仮名「ホルモサ」)と『類聚紅毛語訳』(1798)(振り仮名「ホルモーサ」)に見える。これらの著者は、蘭学者桂川甫周と弟森島中良であり、兄がロシアの地図を翻訳するに際して、「大湾」を採用し、それを弟が自らの著書にも利用したのであろう。しかし他へ影響することはなかった。他に、書名に『大湾国漂泊物語』⁸³(年代不明)がある程度で、日本の他資料に見出すことはできない。

5 「臺灣」系(国内資料所見 1693～現在)

1693～1857年間の「オランダ風説書」⁸⁴に「臺灣」(57例)が見られる。これ以外に『増

80 『南瞻部洲図』(1698) p. 14、「地球儀」(1703頃) p. 19、『南瞻部洲万国掌果図』(1710)、『中華古今分国大成図』(1728) p. 31、『朝異一覽』(1835) p. 37、『大明国十三省之図』(1725) p. 38等(すべて織田武雄等『日本古地図大成 世界図編』)。

81 『日本地図選集 第九巻』(1977 人文社)。

82 上田貞次郎纂訳『萬國地図』(1891 青木高山堂)。

83 東北大学狩野文庫蔵、原本未見。

84 日蘭学会編『和蘭風説書集成』(1977 吉川弘文館)。但し、この「臺灣」以外に「高砂」(1666,67,84年)、「トウネイ」(1672年)、「東寧」(1673,76,77,85年)が見える。

『補華夷通商考』(1709)、『東洋南洋航海古図』(18世紀初期)、『倭漢三才図会』(1713)、『紅毛雑話』(1787)、神沢空口『翁草』⁸⁵(1789)、を始め、現在まで普通に用いられている。当時の通詞が、オランダ人の用いた「Taijouan」⁸⁶を聞き、当時の中国資料により「臺灣」と書いたのであろう。

現在の世界地図でも世界各国で「TAI - WAN」と「Formosa」が採用されている。1805年『アジア図』では「TAI-YUAN oder FORMOSA」と表示されている。

おわりに

「台湾」の日本における呼称を5系統に分類した。西洋語からの訳語「ホルモサ」系は、ラテン語、ポルトガル語からオランダ語、英語等に依るものへと変化した。日本の外交史の変遷と平行して変化してきたのである。日本で最も古い呼称は「高山国」で、その読みは「たかさんこく」であり、コックスの「タッカサンガ」等は日本人の表記では「たかさご」当たる。呼称は年代によって変化し、年代不明資料の年代決定の指標ともなりうる。

独自の統一名を持たなかった台湾に対して、中国が「夷洲」「琉求」「瑠求」等と呼び、次いで「鶏籠山」「北港」「小琉球」「東寧」「大員」「大圓」「大冤」「臺灣」等と呼んだ。また西洋では台湾を「Formosa (フォルモサ)」と呼称したが、中国呼称の「Lequio minor (小琉球)」「TAI - WAN (台湾)」も中国から借用した。どちらも独自の呼称を持ち、互いに影響し合った。

日本では中国の呼称の多くを借用した。一方、日本独自の呼称「たかさんこく→たかさくん→たかさご」もあり、「高砂」と表記した。西洋呼称の「ホルモサ」も音訳し使用した。国姓爺に関わる「東寧」という呼称は、清朝統治後も日本人に長く記憶され使用された。このように、台湾の呼称をめぐるのは、西洋と中国と日本が複雑に絡み合っている。16世紀末から17世紀にかけての国際関係が語史に端的に現れている例である。

85 注70と同書、p. 190。

86 東京大学史料編纂所編纂『日本関係海外史料 オランダ商館長日記』(本文篇、訳文編)の訳者による注には「フォルモサ島の南部ゼーランドディア城の所在地・安平」とある。筆者は次のように考えている。オランダ人は、彼らの居城のある地方名を指していたが、日本の蘭通詞は、中国の地図等で「たいわん」が島名との知識があったので、島名と解釈したのであろう。村上直次郎『長崎オランダ商館の日記』(第一輯掲載)では、1625年頃製図とされる地図に「Taijouwan」と書かれている。又、『オランダ風説書』(1644年)には「Tayouan」と記す。

日本における「台湾」の呼称の変遷について 参考資料（Ⅰ～Ⅴ）

Ⅰ 「琉球」系の表記一覧

表記	年	著者等	資料 番号を附す地図は『日本古地図大成』所収図。以下、各表同じ。
流求國	1269	志磐	佛祖統紀
小琉球	1534	陳侃	使琉球録
小琉球	1562	鄭若曾撰	籌海図編
Lequio minvr < Lequei maior に対して>	1570	オルテリウス	124 東インド図
Lequeio minor	1578	ゲラルト・デ・ヨージェ	(南の島) 『地球の鏡』
Lequeio pequenno < Lequei grande に対して>	1589	オルテリウス	126 太平洋図
Lequejo minor < Lequejo maior に対して>	1594	ベトルス・ブランシウス	ピーテル・ファン・デン・ケーレの 海賊版
Lequio minor	1595	メルカトル	アジア図
Lequeio minor	1598	リンスホーテン	(南の島) 『旅行案内書』
大琉球<小琉球が北にある>	1602	利瑪竇	坤輿萬國全図
小琉球	1609 頃	王圻等編	三才圖會
Lequio pequeno	1610	P.Bertius	アジア図
Lequeo minor	1610	P.Bertius	アジア図
Lequeio minor	1613	ヨドクス・ホンディウス	南の島
小琉球	1622	胡宗憲	海防圖論
小琉球<大琉球が北にある>	1631	日本翻刻	皇明輿地之図 (解説書 p 14)
Lequeo paluevo	1665	内田正雄	ATLAS MAIOR
Lequio minor	1665	Joan Blaeu	ATLAS MAIOR
○○ (不鮮明)、琉球國 (今の琉球か?)	1691	宗覚	21 大明省図
小琉球 (西に大宛)	1709		4 南瞻部洲図
琉球の項目に「大琉球小琉球」	1713	寺島良安	倭漢三才図会
LIQUEO	1715	レランド	131 日本図
LIQUEO	1740	ケンペル等	132 日本図
小琉球	1796	橋本宗吉	82 噶蘭新訳地球全図
臺灣 (東に小琉球もある)	1806	岡田玉山	22 唐土皇輿全図
臺灣 (南に小琉球もある)	1840	画狂老人	27 唐土全図
流求 (唐代図)	1922		東洋史教科書の添付地図

Ⅱ 「ホルモサ」系

表記	年	著者等	資料
y". Fermosa(Reix magos もある)	1570	オルテリウス	124 東インド図
Isola fermosa	1570	オルテリウス	125 タルタリア図
I. Fermosa	1578	ゲラルト・デ・ヨージェ	(北の島) 『地球の鏡』
I. Fermosa	1598	リンスホーテン	(北の島) 『旅行案内書』
ホルモ○	1610	(17C 初期)	6 ボルトラーノ式航海図
I. Fermosa	1610	P.Bertius	アジア図
I. Fermosa	1613	ヨドクス・ホンディウス	(北の島)
Fermosa (9 例), Hermosa	1616	リチャード・コックス	イギリス商館長日記 (9 例は 1616 ～ 20 年)
イ、リヤヘルモウザ (傍注タカサゴト云事也)	1618	池田好運	元和航海記 (京都大学蔵写本)
Ysla Hermosa	1626	デ・ベラ	呂宋臺灣圖
Pakan al Formosa	1646	メリアンマテオ	中国図
I. Formosa	1665	Joan Blaeu	ATLAS MAIOR
I Formosa	1670	ジョン・セラー	『海図帳』
ホルモ○ 東寧	1750	(18C)	49 東亜航海図
Formosa	1765	ボーン	世界図
ホルモウザ	1787	森島中良	紅毛雜話 卷三
ホルモーサ	1789	森島中良	萬國新話 卷四、蛮語箋 (1798)
大湾、ホルモサ	1794	桂川國瑞	81 『北槎聞略』 附図

ホルモーサ (不鮮明)。ボルモーサ (説明文中)	1796	橋本宗吉	82 喝蘭新訳地球全図
大灣 ホルモーサ	1798	森島中良	類聚紅毛語訳
I. Formose	1798	ラ・ペルーズ	135 東アジア探検全図
福尔謨沙、r ホルモーサ	1804	山村才助	訂正増訳采覧異言
TAI-YU AN oder Formosa	1805	ライヒャルト	136 アジア図
ホルモーザ	1820	山片蟠桃	夢ノ代
フアルモザ	1847	箕作省吾	坤輿図識
臺灣 フアルモザ	1847	箕作阮甫	改正増補蛮語箋
臺灣 (右二重棒、左ルビ；ホルモサ) formosa	1856	箕作阮甫訓点	地球説略
ハルモサス、ハルモサ夾	1858	武田簡吾	興墜航海圖
ホルモサ島	1860	玉蟲誼	航米日録
臺灣ホルモサ	1874	内田正雄	輿地誌略
ハルモサス	1875	岡修撰	増訂輿地航海全図 (1872 年初版の再版)
ハルモサ夾	1875	岡修撰	増訂輿地航海全図 (1872 年初版の再版)
ホルモサ (都市名タイワン)	1878	尾藤庸一著訳	萬國地図
Formosa	1911	Thos. Cook and Son	INDIA, BURMA, and CEYLON

III 「たかさご」系

表記	年		資料
高山國	1593		豊田秀吉の国書
たかさくん	1596	(16C 末)	37 浦戸湾漂着西班牙船航海図
たかさくん		(16C 末)	32 世界図屏風
たかさくん	1609	有馬晴信	谷川角兵衛宛心得書
高砂国タカサグン	1615		異国渡海御朱印帳 (増訂異国日記抄附録)
たかさぐん、たかさこ	1610		久能文書
たかさこ (人物図)		(17C 初)	40 世界図屏風
たかさこ		(1609 ~ 19)	42 香雪美術館蔵 世界図屏風
タカサコ		(17C 初)	47 東亜航海図
タカサコ		(17C 初)	48 東亜航海図
たかさこ		(17C 初)	59 万国総図
たかさこ (人物も同じ)		(17C 初)	60 万国総図
たかさこ	1645		7 万国総図
たかさこ	1652		38 世界図屏風
たかさこ (人物も同じ)	1652		61 万国総図、世界人形図
たかさこ	1666	中村惕斎	訓蒙図彙
タカサコ、高砂	1680		52 『波丹人絵巻』所載東亜航海図
タカサコ	1690	(17C 末)	50 小加呂多
東寧 たかさこ (朱字 地名は黒字が多い)	1690		56 地球儀
タカサコ	1698		65 世界図屏風
たかさこ	1590	(16C 末)	33 世界図屏風
たかさこ	1618	池田與右衛門好運	元和航海記
たかさこ	1666		26 扶桑国之図
たかさこ	1720	西川正昌	長崎夜話草
「タカサゴ」島	1820	山片蟠桃	夢ノ代
Taccsange or the Iland Fermosa	1616	コックス	平戸英商館長日記
Taccasango	1617	コックス	平戸英商館長日記 (1617、1618)
Taccasanga	1618	コックス	平戸英商館長書簡 (1618) 日記 (1615 ~ 21)
多加佐古 (都市名たいわん湊)		(17C 初)	35 旧大陸図屏風
多加○古		(17C 初)	36 旧大陸図屏風
多加佐古	1627		御朱印状
多賀佐吾タカナコ	1687	石川流宣	27 本朝図鑑綱目
塔伽沙谷たかさこ	1709	西川如見	増補華夷通商考

塔曷沙古タカサコ	1713	寺島良安	倭漢三才図会
答加沙谷タカサゴ	1720	西川如見	四十二國人物圖説
答伽沙古たかさご	1720	西川正昌	長崎夜話草
塔伽沙古たかさご	1720	西川正昌	長崎夜話草
塔伽沙谷タカサコ (説明文中)	1796	橋本宗吉	82 囑蘭新訳地球全図
塔伽沙古	1810	天錫道人	一宵話
塔曷沙古			唐土歴代沿革図
塔伽沙古			台湾鄭氏紀事
高山国	1593	豊臣秀吉	入貢を促す書
高砂 (砂 不鮮明)	1610	(17C 初)	45 航海古図
高砂	1610	(17C 初)	46 東洋諸国航海図
高砂	1671	立原翠軒	呂宋覚書
高砂	1684	阿蘭陀カピタン	風説書 (こんすたんてん・らんす)
高砂 (日本人仮用)	1709	西川如見	増補華夷通商考
高砂 (不鮮明)	1710	浪華子	6 南瞻部洲万国掌葉之図
和用 高砂 字	1713	寺島良安	倭漢三才図会

IV 「東寧」系

表記	年		資料
東都、東寧	1702	王士禎	香祖筆記
東都	1766	青木昆陽	統毘陽漫録
東番			明史(列伝 211)、東西洋行(1618 年)
東番	1666	中村惕斎	訓蒙図彙
東寧	1602		57 坤輿萬國全図 (手書)
トウネイ	1672	阿蘭陀カピタン(通詞和解)	風説書 (よわのす・かんぶいし)
東寧	1673	阿蘭陀カピタン	風説書 (まるていぬす・せいざる)
東寧	1676	阿蘭陀カピタン	風説書 (よわのす・かんぶいし)
東寧	1685	阿蘭陀カピタン	風説書 (へんでれき・はん・ふいと のむ)
東寧	1703		23 大明九辺万国人跡路程全図
東寧	1708		63 世界万国地球図
東寧とうねい (国性爺以後)	1709	西川如見	増補華夷通商考
東寧	1710		6 南船瞻部洲万国掌葉之図
東寧	1711	土師小右衛門	異国通路考
東寧	1713	寺島良安	倭漢三才図会
東寧	1717	榎島昭武	書言字考節用集
東寧	1720	西川正昌	長崎夜話草
東寧とうねい (国性爺以後)	1721	西川如見	四十二國人物圖説
東寧	1725	浄慧	64 『本朝天文図解』所載 地球之図
たいわん、とうねい	1744	花坊兵蔵	7 南閩浮提諸国集覧之図
とうねい (説明文)	1744	花坊兵蔵	7 南閩浮提諸国集覧之図
ホルモ○ 東寧	1750	(18C)	49 東亜航海図
今ハ 東寧 ト云	1750	(18C 中)	73 和蘭新定地球図
東寧	1766	青木昆陽	統毘陽漫録
東寧とくねぎ (ともいふ)	1787	森島中良	紅毛雑話 卷三
東寧とくねぎ	1789	森島中良	萬國新話 卷四
東寧	1790	(18C 末)	77 世界 4 大州図・四十八国人物図
東寧トクネキ (説明文中)	1796	橋本宗吉	82 囑蘭新訳地球全図
東寧トウネイ	1800	長久保赤水	地球萬国山海輿地全図説
東寧	1802	稲垣子戡	69 坤輿全図
東寧	1810	天錫道人	一宵話
東寧	1835	青苔園	12 清朝一統之図 (『日本の古地図』)
今ハ 東寧 ト云	1835	青苔園	18 朝異一覧
とうねい	1850	(19C 中)	8 万国集覧図
東寧			統萬國新話

V「大宛」系

表記	年	著者	資料
大宛島、大宛タカサコ	1688	石川俊之	62 万国総界図
大宛タカサコ	1698	元禄後期	3 南瞻部洲図
大宛	1709	西川如見	増補華夷通商考
太宛たいわん	1709	西川如見	増補華夷通商考
大宛台湾(唐人命名か)	1709	西川如見	増補華夷通商考
大宛	1710	浪華子	6 南瞻部洲図万国掌果之図
大宛	1713	寺島良安	和漢三歳図会
大宛	1714		異国産物記
大宛國タカサゴ		1729 以前	19 大明国十三章之絵図
大宛タイ・ハン	1728	西田榮欣	14 中華古今分国大成図
臺灣、大宛	1759	澤田貞矩	76 地球分双卯西五帯之図
大宛人、大宛	1789	森島中良	萬國新話 卷四
大宛だいわん	1789	森島中良	萬國新話 卷四
大宛	1789	長久保赤水	20 唐土歴代州郡沿革地図
大宛。大宛台湾(説明文中)	1796	橋本宗吉	82 囑蘭新訳地球全図
大宛	1810	天錫道人	一宵話
大宛タイハン	1820	山片蟠桃	夢ノ代
大宛ワン島	1835	青苔園	18 朝異一覧
大宛ワン島 東寧	1835	青苔園	清朝一統之図(『日本の古地図』の12)
大宛	1850	(19C 中)	8 万国集覧図
大宛	1850	山崎美成	110 地球万国山海輿地全図説
大宛台湾	1852	(江戸末) 小松公峯	111 地球万国全図説覧
大宛	1850	(19C 中)	113 万国人物之図
大宛たいはん	1853		121 万国山海通覧分図
大宛			唐土歴代沿革図、旧章録
大宛(右振り仮名台湾)	1717	槇島昭武	書言字考節用集
大湾、ホルモサ	1794	桂川甫周	81 北槎聞略
大灣 ホルモーサ	1798	森島中良	類聚紅毛語訳
大ハン	1800	(19C 初)	16 世界三国記
大ワン	1850	(19C 中)	104 世界六大洲
大ハン	1853	(19C 中)	112 蒙古退治万国早分図
臺灣	1693	阿蘭陀カピタン	風説書(へんでれき・はん・ぶいと のむ)
臺灣台湾	1695	阿蘭陀カピタン	風説書(へんでれき・でいきまん)
臺灣	1699	阿蘭陀カピタン	風説書(へんでれき・でいきまん)
台湾たいわん	1709	西川如見	増補華夷通商考
臺灣	1710	(18C 初)	
臺灣	1713	寺島良安	和漢三歳図会
臺灣	1720	阿蘭陀カピタン	風説書
臺灣	1720	阿蘭陀カピタン	風説書(よわん・おううる)
臺灣台湾(おらんと人号す)	1722	西川如見	四十二國人物圖説
臺灣	1730	阿蘭陀カピタン	風説書(あ・ぶらむ・みんねんどん こ)
臺灣	1731	阿蘭陀カピタン	風説書(びいとる・ぼうこすていん)
臺灣	1732	阿蘭陀カピタン	風説書(びいとる・ぼうこすていん)
臺灣	1733	阿蘭陀カピタン	風説書(ろきいる・で・らあへる)
臺灣	1734	阿蘭陀カピタン	風説書(ろきいる・で・らあへる)
臺灣	1748	阿蘭陀カピタン	風説書(やん・るういす・で・ゑん)
臺灣	1748	阿蘭陀カピタン	風説書其二
臺灣	1749	阿蘭陀カピタン	
臺灣	1750	阿蘭陀カピタン	風説書(へんでれき・はん・ほうむ うと)2ヶ所
臺灣	1754	阿蘭陀カピタン	風説書(へんでれき・はん・ほうむ うと)

臺灣	1756	阿蘭陀カピタン	風説書（へるへると・ふるめへる）
臺灣、大宛	1759		76
台灣	1766	青木昆陽	続昆陽漫録
台湾	1766	青木昆陽	続昆陽漫録
臺灣	1767	阿蘭陀カピタン	風説書（へるまん・かすてんす）
臺灣	1774	阿蘭陀カピタン	
臺灣（不鮮明）	1775		72 フィセル改定ブラウ世界図古写
臺灣	1778	阿蘭陀カピタン	
臺灣	1783	阿蘭陀カピタン	
臺灣	1784	阿蘭陀カピタン	
臺灣	1785	阿蘭陀カピタン	
臺灣	1786	阿蘭陀カピタン	
臺灣	1787	阿蘭陀カピタン	
臺灣（華人は呼で）	1787	森島中良	紅毛雑話 卷三
臺灣	1788	阿蘭陀カピタン	
台灣	1789	神沢枉口	翁草
臺灣だいわん	1789	森島中良	萬國新話 卷四
臺灣タイワン（説明文中）	1796	橋本宗吉	82 囑蘭新訳地球全図
臺灣	1797	林子平	74 地球図
臺灣	1801	阿蘭陀カピタン	
臺灣	1801	志筑忠雄	異人恐怖伝
臺灣	1802	阿蘭陀カピタン	
台灣	1802	薩摩官版	円球萬国地海全図
臺灣	1804	阿蘭陀カピタン	
臺灣	1806	阿蘭陀カピタン	
臺灣	1807	阿蘭陀カピタン	
臺灣	1809	阿蘭陀カピタン	
臺灣	1809	古屋野意春	万国一覽図（『日本の古地図』）
臺灣（ルビ不鮮明）	1809	古屋野意春	17 万国一覽図
台灣	1810	天錫道人	一宵話
臺灣	1810	幕府官版	新訂萬国全図
臺灣	1814	阿蘭陀カピタン	
臺灣	1818	阿蘭陀カピタン	
臺灣	1820	阿蘭陀カピタン	
臺灣	1821	阿蘭陀カピタン	
臺灣	1822	阿蘭陀カピタン	
臺灣	1823	阿蘭陀カピタン	
臺灣	1826	阿蘭陀カピタン	
臺灣	1830	阿蘭陀カピタン	
臺灣	1831	阿蘭陀カピタン	
臺灣	1833	阿蘭陀カピタン	
臺灣	1834	阿蘭陀カピタン	
臺灣	1836	阿蘭陀カピタン	
臺灣	1838	阿蘭陀カピタン	
臺灣	1839	阿蘭陀カピタン	
臺灣	1840	阿蘭陀カピタン	
臺灣	1842	阿蘭陀カピタン	
臺灣	1843	阿蘭陀カピタン	
臺灣	1847	阿蘭陀カピタン	
臺灣、臺灣府	1847	箕作省吾	坤輿図識
臺灣タイハン	1847	箕作省吾	坤輿図識
臺灣 フラルモザ	1847	箕作阮甫	改正増補蛮語箋
臺灣	1848	阿蘭陀カピタン	
臺灣	1849	阿蘭陀カピタン	
臺灣	1850	阿蘭陀カピタン	
臺灣	1851	阿蘭陀カピタン	

臺灣	1852	阿蘭陀カピタン	
臺灣	1852		地球萬国方図
臺灣	1853	阿蘭陀カピタン	
臺灣	1854	阿蘭陀カピタン	
臺灣	1855	阿蘭陀カピタン	
臺灣	1855	山路歌譜考	重訂萬国全図
臺灣	1855	幕府官版	重訂萬国全図
臺灣	1856	阿蘭陀カピタン	
臺灣	1856	近藤岨山	120 万国地球分図
臺灣	1856	箕作阮甫訓点	地球説略
臺灣	1857	阿蘭陀カピタン	
臺灣	1858	鈴木本栄	29 大清歴代人物旧地全図
臺灣	1858	塩田世弘	地理全志
臺灣島 臺灣	1860	玉蟲誼	航米日録
臺灣	1865	新発田収蔵	30 大清一統図
台湾たいわん	1868	不及斎	119 万国渡海双六
臺灣島	1875	永田方正	萬國地誌略字引
台湾	1875		増訂輿地航海全図
臺灣	1891	大橋新太郎	万国地図
臺灣	1892		最新の東亜形勢図解
台湾	1893	野際馨	日本全図
臺灣	1894	松本謙堂	日本帝国新地図
台湾 台湾 台湾（都市名）	1894	若原與三郎	萬國新地図地理統計表
臺ワン	1894		万国地図
臺灣	1894		万国地図
臺灣	1897	山上萬次郎	世界新地図
臺灣	1898		新撰普通地理
臺灣	1900		新撰帝国地図
臺灣	1901	森熊五郎	大字萬国地図
台湾	1901		大字萬国地図
臺灣	1902		世界讀史地図
台湾	1904	白井理三郎	満韓地図
臺灣	1906	後藤七郎右衛門	日本輿地図
台湾（都市名）	1906		万国新地図地理統計表
臺灣	1906	山上萬次郎	最近統合外国地図
臺灣	1906		最近統合外国地図
臺灣	1906		外国新地図附図
臺灣	1908	文部省	小学地理 附図
臺灣	1908		最近帝国地理附図
臺灣	1909		世界交通全図
臺灣	1909	文部省	小学地理 第一
臺灣	1910		外国地図
臺灣	1910		小学地理 附図
臺灣	1913	三省堂	最近地理通論 全
臺灣	1914		列強大戦争地図
臺灣	1916	三省堂	世界地理
臺灣	1919		改造世界地図
台湾	1919		世界新地図
臺灣	1921		最近世界地図
臺灣	1922		東洋史教科書
臺灣	1922		改新日本詳図
臺灣	1925	文部省	高等小学地理書 巻一
臺灣	1925		最近世界地図
臺灣	1925	東京開成館	標準世界地図
臺灣	1933		帝国国防大地図
臺灣	1935	文部省	高等小学地理書 附図

臺灣	1939	淵田忠良	支那事变戦局並に処理明細地図
臺灣	1939	文部省	尋常小学地理書 卷二
台灣			紀事引郡國利病書
たいわん	1713	寺島良安	倭漢三才図会
たいわん (説明文)	1744		7 南閩浮提諸国集覧之図
タイハン	1783	三橋鈞客	67 地球一覽図
TAI-YU A N oder Formosa	1805	ライヒャルト	136 アジア図
ダイワン	1835	箕作省吾	新製輿地全図
タイワン	1836	松本儀平	105 地球万国全図
タイワン	1846	永井則	91 銅版万国方図
タイワン	1847	箕作省吾	坤輿図識
タイワン	1847	箕作省吾	89 新製輿地全図
タイワン	1848	永井則	17 銅版万国輿地方図
たいわん、とうねい (説明文)		(19C 中)	8 万国集覧図
タイワン	1850	栗原信晁	107 万国地球全図
タイワン	1850	(19C 中)	114 地球万国全図
タイワン	1851	鱸重峇	94 校訂輿地方門図
タイ湾	1852	新発田収蔵	95 新訂坤輿略全図
タイワン	1872		萬国輿地細全図
タイハン	1873		航海世界全図
タイハン	1886		萬国精図
タイハン	1886		萬国精図 完
タイワン タイワン (都市名)	1891		萬国地図
TAI-WAN (Jap) (Formosa)	1921	E. G. Ravenstein. Ph. D., F. R.G. S.	Philips' Handy-Volume Atlas of the World
支那共和国 (旗)	1925		標準世界地図

(神戸大学大学院人文学研究科)